

## 資料編 秩父の道陸神焼き

著者	高橋 稔
雑誌名	歴史地理学調査報告
号	7
ページ	149-154
発行年	1996-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/105404">http://hdl.handle.net/2241/105404</a>

# 秩父の道陸神焼き

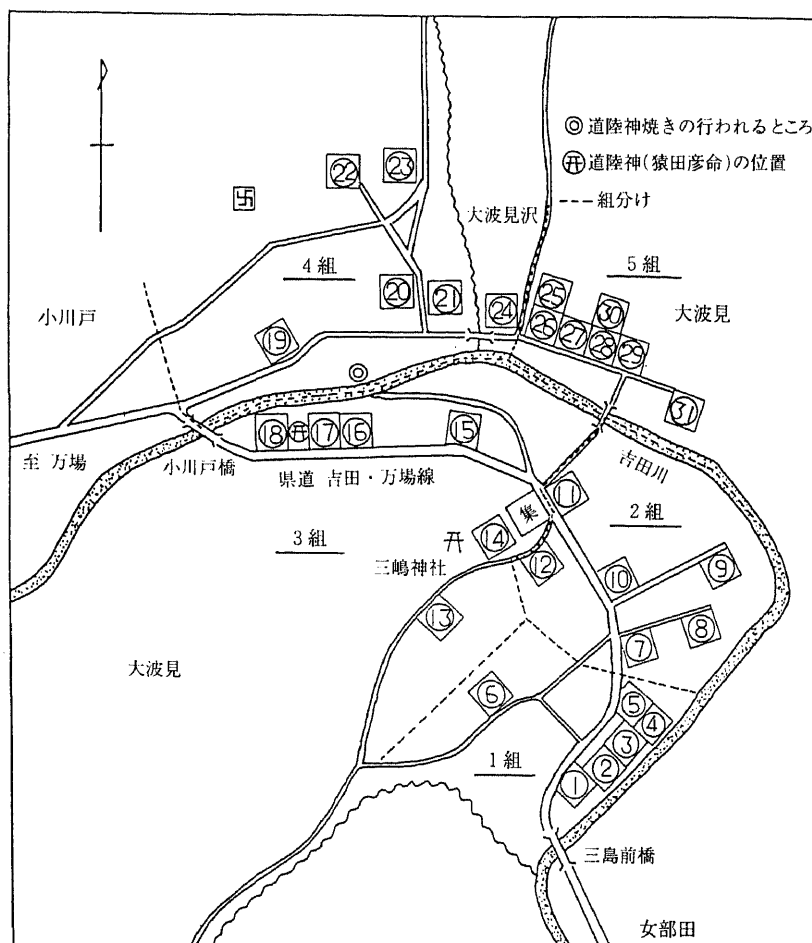
高橋 稔

## I 大波見の地域概要

大波見耕地と呼ばれる集落(第1図, 第1表)は、埼玉県秩父郡吉田町大字上吉田のはば中央部、山間に発達した小集落である。秩父盆地の北端に位置する吉田町中心部から、北に約9 km入ったところにあり、平成元年(1989)2月1日の戸数は32戸、

人口125人である。集落の中央部を赤平川の支流である吉田川が東流し、この河川の右岸を県道である吉田・万場線が西上する。東方は秩父郡皆野町に通じ、西方は塚越地区から二方に分かれ、一方は土坂峠を越えて群馬県万場町へ、もう一方は小鹿野町倉尾地区へと続く。

大波見は、江戸時代から第二次世界大戦後まで



第1図 大波見耕地の概略図

注) 家屋の番号は第1表に対応する。

第1表 大波見の家および屋号

	番 号	姓	備 考
一 組	1	小松	
	2	斎藤	
	3	宮前	
	4	黒沢	
	5	岡本	
	6	山口	
二 組	7	福田	隣
	8	斎藤	下手
	9	水野	畑中
	10	金山	
	11	斎藤	棚
	12	岡本	
三 組	13	黒沢	機屋の分家
	14	高橋	
	15	黒沢	機屋
	16	原	諸日影
	17	佐伯	経師屋
	18	原	湯場
四 組	19	斎藤	堂坂の上
	20	田村	堂坂の下
	21	田村	新井
	22	田村	
	23	田村	
	24	斎藤 飛松	(転出)
五 組	25	斎藤	大波見上
	26	斎藤	大波見下
	27	小林	せど
	28	斎藤	上手東
	29	斎藤	東
	30 31	荒川 垣境	清水

は、上吉田村として独立した一村であった。江戸時代には御料所として位置づけられ、石高は1469石5斗8升6合であった。その後、明治22年(1889)の町村制施行時に、石間村と太田部村の2村を吸収合併して村域を拡大し、昭和31年(1956)の町村合併促進時に吉田町と合併して現在に至っている。上吉田村の集落は、江戸時代初期から現在に至るまで村落構成をまったく崩しておらず、13の耕地からなる。それは石間戸・大棚部・宮戸・千

鹿谷・中島・久形・女部田・大波見・小川戸・塚越・明ヶ平・小川・女形である。本稿の調査対象である「道陸神焼き」は、古くから集落を東流する吉田川の河川敷で行われる習わしである。

大波見は、江戸時代から第二次世界大戦後まで、おおむね20戸前後の世帯数を維持してきた。その後、世帯数は増えているが、高齢化の進行と出生率の低下が著しい。周囲を山に囲まれた大波見の人々は、傾斜地を切り開き、畑仕事や山仕事を主体に生活を営んできた。水田はない。戦前までは大部分が専業農家で、農作物の栽培や山仕事のほかに、各家々では牛・羊・山羊・鶏などを飼育する複合経営を行ってきた。主な生業は、麦・さつま芋・大豆・小豆・粟・稗などを栽培する畑作と、養蚕、冬仕事の炭焼きなどであった。麦は多くの家で長い間、主食とされ、昭和40年頃まで大・小麦が栽培されてきた。現金収入源としての養蚕がとくに盛んで、麦とともに一家の生産を支えてきた。現在でも2、3の農家が蚕を飼っている。炭焼きも盛んで、半数以上の家が手掛けてきた。全盛期には12月の中旬から6月の上旬にかけて、1戸当たり4貫目俵で600俵を焼いたという。炭は白消しで、仲買人を通して販売した。仲買人は近くの塚越地区からきた。

1年の生業サイクルは、「蚕が出るまでは山仕事や炭焼きをし、夏場は養蚕と畑に精を出す。秋の麦作りが終わればまた山に行く」という。これらの生業のほか、近世には農閑期に木を伐って、桶の板になるクレを川だししたり、薪をとったり、紙すきを行っていた。明治中期から昭和初期には、集落の中央部に1軒の機屋があって賑わった。

## Ⅱ 道陸神焼き

大波見の「道陸神焼き」は、最近「どんど焼き」とも呼ばれるが、地元で古くから呼ばれてきた名称は「道陸神焼き」であった。「道陸神焼き」を経験してきた古老は「どんど焼き」の名称はなじまないとやっている。「道陸神焼き」は、古くから1月14日に行う習わしである。当日の午後から

準備を行い、夜7時頃に「道陸神焼き」のヤグラ（櫓）に火をかけて焼き払う。近年までは、子供たちだけの行事であった。「道陸神焼き」の準備や櫓作りについては、次項で説明する。火祭りを行う場所は吉田川の河原で、ここはかつてのムラ境であった。

「道陸神焼き」の御神体については、古くから存在しなかったのかどうかは即断できないが、明治時代の中期以降には認められない。集落の西部、小川戸とのムラ境に、通称「道陸神様」と呼ばれている道陸神の祠がある。祭神に猿田彦命を祭り、氏子はかつて4戸であった。この場所は、諸日影という地名で、諸日影という屋号の原姓を本家に、現在3戸の産土神として祭られ、氏子たちの篤い信仰がある。明治時代の様子を知る耕地内の生え抜きなどの古老たちの話でも、集落内にただ一つある「道陸神の祠」と、「道陸神焼き」との関係は明確でない。「道陸神様の祠があって、その近くで昔から道陸神焼きを続けてきたのだから、関係がないとはいえない」という程度である。

以下、原家の氏神である「道陸神の祠」について、見落とせない点があるので、記録しておく。

#### 〔原家の道陸神様〕

祭 神 猿田彦命  
氏 子 原姓の3戸  
祭 日 3月28日  
日待ち 3月27日

「道陸神様」の縁日は、第2表・第3表に記したとおり、3月28日である。祭りの準備は、前日の3月27日の早朝に行われる。3戸の氏子が「道陸神様」に集合して周囲の清掃を行い、2本のお旗を立てる習わしになっている。現在のお旗は昭和44年(1969)にあげられたもので、長さが4m、幅が30cmほどのものである。旗には、「奉納 猿田彦大神」とあり、「当所」として原姓の3名の名前が記されている。「古くから、原マケの家だけで道陸神様を信仰してきた」と言う。原マケの家は、近年まで4戸あった。3月27日を「前夜祭」と

言い、夕方から道陸神様の日待ちを行う。日待ちの宿は、回り番に行われる習わしである。日待ちには、3戸の氏子の家からそれぞれ代表者が1名ずつ出る。宿に当たった家では、あらかじめ氏子の家から米3合を集めるほか、油揚げなどの材料を用意する。醤油のむすびは、古くから全員で作ってきた。日待ちの食べ物、昔から油揚げの醤油むすびと漬け菜である。醤油のむすびができあがると、酒を飲みながら日待ちの一晚を楽しむ。28日の縁日は、とくに行事はない。

「道陸神様は耳の神様だ」と言い、拝むと耳の病気が治るといふ。また、「道陸神様を拝むと耳の病気にかからない」とも言い、祭日にかかわらず祠を拝んでいる。道陸神様は、穴の空いたものをととても好むという。このため、当地方ではデエロウというカタツムリの殻を、糸につるべて供えている。カタツムリがないときは、穴の空いた河原の石でもよい。糸には、供える人の年齢と同じ数だけつるべる。耳の病気が治ったあかつきには、お礼にこれと同じものを供えた。なお、かつては、大波見以外の吉田町各地でも、「道陸神焼き」または「道陸神焼き」の行事がみられた。

第2表 大波見におけるムラ全体の日待ち

日時	名称	食 物	特徴など
1/14	金毘羅様	油揚げの醤油むすび約30人分	昭和35年ころから「道陸神焼き」の日に行われるようになった。それ以前は、4月10日に行われた。春祭りといわれている。
4/12	前鬼様	白むすび	春、秋の2回行うならわしである。秋は、11月12日に行う。11月の道普請の日待ちを兼ねている。
5/1	八十八夜	油揚げの醤油むすび	行事の受け渡しを行う。行事は一年交替。各組から1人ずつ回り番で出る。当番制もあり、当番は2軒一組で回っていく。
10/15	八坂神社	昔は醤油むすび。今は寿司でやる。	天王様の祭り

第3表 大波見における同族神等の日待ち

日時	名称	食 物	同族および特徴など
1/24	天神様	稲荷寿司	新井地区の田村家4軒で祭る日待ち。大人の日待ちである。子供達は別に行った。
1/26	三嶋様	稲荷寿司	二組の氏子が多い。畑中3軒と、黒沢家の日待ち。
3/15	地神様	醤油むすび	五組の斎藤家を中心に5軒で行う日待ち。石祠があり、天神様と愛宕様を合祀する。
3/27	道陸神様	醤油むすび	原家だけの日待ちで現在3戸。道陸神様の縁日は、3月28日で前夜祭としての日待ちである。古くからこの内容で行っている。
4/27	不動様	稲荷寿司	斎藤家の2軒だけで行う。五組の大波見上と大波見下といわれる家の日待ち。石祠がある。
8/26	お諏訪様	甘酒 醤油むすび	道陸神様と同じ氏子で行い道陸神様にお諏訪様が合祀されている。27日が火祭で26日は前夜祭という。
10/5	先祖祭り	醤油むすび	現在10月の第二日曜日ころ行う。斎藤家の9軒で祭っている。北条氏の家臣で斎藤家の先祖、馬之丞をしのぶ日待ちである。
春秋の彼岸時	社日講	シロメシ (白飯)におひらつき、人参、ごぼうなど七色を添える副食	畑中3軒と原家1軒、斎藤家1軒の5軒で行う日待ちである。
10月～4月	庚申講	シロメシ (白飯)におひらつき、人参、ごぼうなど七色を添える副食	庚申の日年に4回ほど行っていた。庚申様は手が6本あるといい、忙しい時は手を借りるという。9戸で行い、家の繁盛を祈る。
昭和初年消滅	甲子講	ごもくむすび きんぴら	かつては、13戸で行っていた。家の繁盛を願う日待ちという。この日待ちには、ムジンという賭け事の遊びを行った。

## 1) 道陸神焼きの準備

「道陸神焼き」は、明治時代中期から昭和35年頃までは、子供だけの火祭り行事であった。それ以前の様子は、よく知られていない。子供とは、ワカイシ(若衆)前の男子をさす。「道陸神焼き」に女子は参加できない習わしである。明治時代中期から、昭和30年頃までにおける「道陸神焼き」の参加人員は、平均20人前後で安定していた。

「道陸神焼き」の準備は、正月の松飾りを集めることに始まる。子供たちは、1月14日はいちはやく学校から帰宅して準備に入る。とくに組織的なものではなく、「親方」と呼ばれる最上級生たちが、すべての指図を行う。子供たちはそれに従って動き回る。準備は、大きく分けて二つの作業からなる。「松集め」と言う正月の松飾りの収集と、竹を骨組みにした槽作りである。この二つの作業は、分担して手際よく進められる。

子供たちは学校から帰ると、まず昼食を済ませる。時代によって、「道陸神焼き」に参加する子供たちには、学校でも早退を許した。下校の途中、親方から中・低学年の子供たちに、集合時間や段取りなどが伝えられる。「道陸神焼き」に参加する子供たちは、昼食後の休憩もないほど忙しく家を出る。火祭りをを行う場所は、シタノカワラ(下の河原)である。下の河原に行くときは、まず自宅の松飾りを運んで行く。多くの家々で、子供たちが運びやすいよう、松飾りを玄関先や庭先などに束ねて出しておく。

近年の松飾りは小型化しているが、戦前のものは量も多く、大型の松飾りを用いていた。正月飾りの中では、門松が最も大きく「サンガイノマツ(三階の松)」と言った。門松以外には、神棚・座敷・荒神・恵比須・仏壇・トボウ(玄関)・井戸神・屋敷神・便所神・立ち白・ひき白などに飾る松がある。これは、暮れの三隣亡を除くよい日に飾り、1月14日の朝下げる。これらの松飾りは、家によって多少その量や大きさが異なっている。子供たちは、これらの松飾りをすべて吉田川のほとりまで運ばなくてはならない。戦前の1戸単位の松飾りの束は、1人の男児が抱えたり担げる量

を上回る。このため、子供たちは運搬に工夫を凝らした。三階の松を一番下に置き、その上に他の松を乗せて、縄などで縛る。さらに、三階の松の一階部分に、引っ張る縄を通す。こうして、工夫しながら松飾りを引っ張ったり、押ししたりして集めていく。大八車やリヤカーを利用したのは、その後のことである。集落の家々を結ぶ小道や往環、さらに吉田川の河川敷へと続く小道へと、子供たちは効率的にせっせとお正月の松飾りを集めて回る。どこへ行くにはどの道を通ったらよいのか、子供たちは熟知している。とくに、河川への降り道は、魚取りや川遊びなどを通じ、危険な場所は心得ていた。中・低学年の子供たちは、2人1組でこの仕事に携わる。指図は、親方が的確に出す。下級生は、この命令に従う。子供のいない家では、松飾りをその家の大人が運んでくれる場合もある。こうして2時間ほどで集落内全部の松飾りが、下の河原に集められる。

昭和35年ごろから、子供だけの「道陸神焼き」は大きく変貌する。過疎化による子供の減少と、社会生活の変化に伴う伝統行事の簡略化・縮小化のため、「道陸神焼き」は、もはや子供たちだけの手に負えない状況に陥った。大人たちの相談では伝統の火祭りを守ることで一致し、子供たちの「道陸神焼き」を陰から支援することとなった。その結果、5組から1人ずつ組長が出て「道陸神焼き」を支援した。昭和40年代の後半になると、大波見耕地の松飾りだけでは、量が足りなくなってきた。このため松飾りの収集範囲を拡大し、近郷の集落まで協力を依頼した。大人たちが2、3台の軽トラックを準備し、子供はこれに分乗して、松飾りを集めて回る。現在はシモ（東部）は久形方面に及び、カミ（西北部）は明ヶ平までをその範囲としている。近年は、正月の松飾りだけでなく、古い達磨や熊手なども出される。

松集めとともに、「道陸神焼き」の櫓作りを行う。この仕事は、主として上級生が担当する。櫓を作る場所は、下の河原である。流路は、前年に大水でも出ない限り変わることはない。この場所は、大波見耕地の西部における、小川戸とのムラ境の

近くである。火祭りを行う場所は、大小の石が散在している。大きな石を移して、「道陸神焼き」を行う場所を整地する。「道陸神焼き」の小屋は、「ヤグラ(櫓)」とか、「ドウロクジンノヤグラ(道陸神の櫓)」と言っている。櫓作りには、第4表のような道具が必要である。これらは、親方たちが各自の家から持ってくる。

道陸神焼きの櫓を作るためには、4 m四方ほどの場所を要する。整地の後、準備した杭を掛け矢で打ち込む。4本の杭の間隔は正方形で、一辺の長さが3 mほどである。10 mほどの真竹を支えるため、地中に60 cm以上を打ち込む。杭打ちの後には、4本の真竹の固定である。竹は、上部の枝2、3 mを残して、下枝は鉋で払う。支柱や藁縄などを補助的に使って、1本ずつしっかりと杭の位置に立てる。竹の曲がったほうの内側を、四角錐の頂点に向ける。杭と竹は、藁縄で3箇所を結わえる。上部は縛ることなく、4本の竹を中央で絡ませる。これを、「芯を集める」という。

次は、松飾りを掛ける縄を張る作業である。縄は、櫓の地上1 mほどのところから4周に張り巡らす。50 cmの間隔で4、5段にし、下から順にかけていく。高いところは梯子を用いる。その次は、中・低学年生が運んだ飾り松を、櫓に掛ける仕事である。大きい松飾りは櫓の下段の縄に、小さいものは上段に掛けていく。下の段から順に掛ける。木のサシマタ(さし又)や梯子などを用いて行う。松はすべて葉先を下に向け、枝を縄に掛ける。固定しなくても落ちることはない。年によって松飾りの量が異なるが、そのときは櫓の松掛けを厚くしたり、薄くしたりして調整する。

戦前は、櫓作りをなるべく早く終了させた。櫓

第4表 櫓作りに必要な道具

名称	数 量	寸法・形状など
真竹	4本	長さ約10m 近所で貰い受ける
藁縄	50m	
麦藁	15束	櫓の中に入れる
杭	4本	長さは1本1.3mほど
その他	各2ほど	掛け矢、鉋、鉋、唐鋸、梯子など

が完成すると、子供たちは中に麦藁を厚く敷き詰め、遊び場にした。このころは、温度もグッと冷え夕闇が迫ってくる。櫓の完成の喜びに浸りながら、夕食を食べに行く前のひとときを、楽しく遊んで過ごす。暗くなると、子供たちはいったん家へ戻り、夕飯を済ます。こうして櫓を作ったのは、昭和35年頃までである。それ以後、大人が支援をするようになった。1月14日は、午前8時頃に集合し、1時間ほどかけて櫓作りを行う。近年の櫓は、正月飾りの松が少なくなったため、竹をふんだんに用いる。爆竹音がしてよいという。

## 2) 火入れと片付け

「道陸神焼き」の櫓への点火は、午後7時頃である。子供たちは再び櫓に集合する。この時間には、「道陸神焼き」に参加する子供たちばかりだけでなく、耕地内の大半の人々が見物にくる。櫓への点火は、昔から親方が行う習わしである。月明かりを頼りに、櫓の中に敷き詰めた麦藁に火を放つ。やがて、炎が冬の夜空に燃え広がり、壮大な火柱になっていく。青竹が爆竹状となって撥ね続け、空に火の粉が乱れ飛ぶ。大人や子供たちの歓声に加わり、幻想的な光景のうちに火祭りのクライマックスを迎える。点火から火勢が弱まるまでの時間は、およそ40分。この間、達磨や神社の古い神札などを火中に投じて焼き尽くす。火が弱くなるにつれて、参加者のどよめきもしだいに薄れるころになると、「道陸神焼き」が終了する。

「道陸神焼き」の火が消えかかると、あたりは再び真っ暗な世界に戻る。それを見計らい、吉田川の水をバケツで汲んで、残り火にかけていく。河原とはいえ、乾燥期なので完全に消火しておかなければならない。近年は、地元の消防団が出勤して、消火活動に携わっている。消防団は、火災

予防のため「道陸神焼き」が行われる前に周囲に散水し、行事の終了後に消火を確認する。

## Ⅲ 火祭りの習俗と呪力

昔から「道陸神焼き」の火が原因で、火事になったことはない。集落内の火災も少ないという。明治以降、1月14日が大風になったことは2回ある。そのときは、耕地内の全員で相談をして、日時をずらして実施した。「道陸神焼き」のお陰で、大波見には伝染病が発生したことがないという。

古くは「道陸神焼き」の火が下火になってくるころを見計らい、大人たちが茶碗酒で一杯やる習わしであった。このとき、「繭玉」を焼いて食べながら談笑した。子供たちは、屋外神に供えられた「繭玉」を、近隣の集落まで取りに行く。これを食べると、風邪をひかないといわれている。

「道陸神焼き」に参加した人は、松の燃えくじを拾って帰る。燃えくじは、燃えつきてしまわないうちに、川へ浸して取り出しておく。1人が1本、30cmほどの燃えくじを持ち帰る。これを、トボウ(玄関)に吊しておく、火難除け、疫病除けになると伝えられている。

「道陸神焼き」の煙を嗅いだり、あたったりすると、風邪をひかないという。煙を拝んでもよく、長生きにもご利益があるという。古老の話によれば、「大波見は小集落にもかかわらず、昔から長寿者が多い」と言う。ちなみに、現在80歳以上の老人が10人以上いる。この数字は、近隣の集落と比較して多い。

明治43年頃までは、「道陸神焼き」の終了後に大人たちが酒を飲みながら、婿の胴上げを行った。胴上げの対象になる人は、その年に婿入りした人で、酒は婿の家で振る舞うことになっていた。